

---

## 糸束

ぬじゃわきし

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

糸束

### 【Nコード】

N98310

### 【作者名】

ぬじゃわきし

### 【あらすじ】

ある日突然、瑠田龍子は、体が糸束状に分裂する「回路人間」に変身してしまった。人々が怪物として忌み嫌うその人種、彼らの本当の能力、意味とは。やがて、両者の対立によって起きる戦争。そして、人格の融合を経て主人公は徐々に自我が崩壊していく……。シールドでグロテスクなホラー。

朝。小鳥が静かに鳴き、窓から木漏れ日が差し、その光に気づいて龍子は目が覚めた。布団は体の上に柔らかく、多少の重量感を伴いながら覆い被さっている。今日、学校あるかな…と目を擦りながらカレンダーを見た。今日は…日曜日。休日である。そうか良かった、もう少し寝れる…と龍子はごろりと寝返りを打った。

だが奇妙な感触。右手の甲がざわざわと感じた。虫でも歩いているのだろうか、と龍子は右手を見たが、虫はいない。やや白い右手がそこにあるだけである。なんだろう、さっきのは。龍子を右手をじっと見つめていた。だが変化はない。龍子はさっきのざわざわ感を思い返した。骨が触られるような、冷たい痛みに似た感触。

ふと思い返す事に連動して、無意識に何かを右手に指示した。右手はたちまち、赤い細い管状に分裂してうごめき出した。龍子は目を見張った。管はうごめき続け、やがて収束し、右手を形成した。

龍子は軽いため息をついた。嗚呼、なぜであらう。何がきっかけなのだろう。朝目覚めたら“回路人間”になってしまっていた。右手を赤い糸束に分裂させては戻し、分裂させては戻しを繰り返した。糸束の奥に骨が垣間見えた。見つめながら龍子は再びため息をついた。

これからどうしよう、と龍子は思った。明日は学校だ。休日を隔てて、突然“回路”になってしまったと友達が知ったらどんな反応が来るだろうと恐れた。なぜなら、“回路”は皆に避けられる運命だからだ。その不気味でグロテスクな姿を見て食欲を失う者が多くい

るのが常々である。そのため、学校によっては「特別教室」とやらの隔離する場所すらあったが、幸い、龍子の学校にはない。

“回路”をコントロールして隠せばいい。だが、うっかり見せてしまふ者もいる。自分は果たして隠せるのか、と龍子は思った。

その上、ばれたとして“回路”に親しくする人間は、大抵は“回路”か、キワモノが好きな異常者であった。中には博愛な方もいるのだが、それも少数である。どうしよう。

とりあえず龍子は悩むのをやめて、起きる事にした。布団を翻して、足をベッドの外に出した。足とて、糸束になったり戻ったりと不安定であった。おそらく全身がそうに違いない。母にどう打ち明けようか。

「お母さん、私、“回路”になっちゃったー。」

と言ってグロテスクな姿を母の前に晒したら、たちまち母は気を失うに違いない。だめだ。

ベッドから出て、パジャマ姿の龍子はそのまま部屋にあるやや大きな化粧鏡へと向かい、自分の上半身を鏡を通して見た。身体は、不安や恐怖などの心情に反応して糸束に変化するらしい。顔も所々変わっていた。やや長い垂れた髪の毛すら、メデューサのように糸束として蠢いていた。

落ち着こう、と思った。龍子は鏡の自分に向かって、落ち着け、落ち着け、と自己暗示を送った。幸い暗示は効いて、徐徐に収束していった。元の身体に戻った時、彼女は三たび、安堵のため息をついた。しかし不安になるたびに“回路”では、よほど超越した精神構造でもない限り隠すのは無理だな、と彼女は思った。

こん、こん。

ノックの音に彼女は驚いた。一瞬身体は崩れた。彼女は言った。

「何？」

「ご飯できたわよ。」

龍子の母が答えた。龍子は返事をし、鏡で姿を確認しながら家を出た。

リビングに来ると龍子の母が訊ねた。

「龍子、どうしたの？元気が無いわね。」

「うつん、なんでもない。」

一抹の不安。それが龍子の左腕を一瞬変化させたが、母はそれに気づかず、話しかけてきた。

「とりあえず、ごはん食べたら。元気になるよ。」

食卓の椅子に龍子は座った。が、何故であろう、食欲がない。龍子はフォークを持ち、パンとスクランブルエッグを眺めたが、そもそもそれがどんな物か、そして食べるという行動が何かすら忘れてしまっていた。つまり食べられなくなったのだ。

龍子は言った。

「ごめん、食べれない。」

母はますます不安になり、龍子に寄って、「熱があるんじゃない？」と龍子の額に手を当てた。

その時龍子は、押さえられた自分の額が変化し始めた事に気付いた。単純な話である。刺激に応じて変化しただけだ。“回路”に様変わりしていた龍子の額は、本能的に、母を知ろうと、母の手の平に接しようとした。

「いたい！」

母は叫んで手を振った。龍子の額の変化には気づかなかつたらしい。額は元に戻っていた。母は手の平を見たが特に傷痕はなかった。

龍子は一瞬迷いが生じ、どうすればいいか思案したが、やはり決意した。

「お母さん……」

母は心配そうな顔で「どうしたの？」と訊ねた。

「今大変な事打ち明けるけどいい？」

「大変な事？」

「これ言っても、お母さん、避けたりしないでね…」

「…分かった…避けない…」

「私…私…」

言ううちに彼女は哀しみが沸いてきた。もう、これからずっと、母とは、そして周りとは違う人間のまま暮らすのだ。否、“人間”を喪失して生きねばならないのだ。私は違う存在。

「…“回路”になったの。」

言い切った時には龍子の身体は赤い糸束へと枝分かれし、崩れていった。母は悲鳴を抑えきれなかった。父がそれで起床した。

幸いにして龍子の両親は彼女に優しく対応してくれた。原因はともあれ、彼女なりに苦しんでいる事を理解してくれたためである。両親は龍子のためにその時折見せる姿に慣れてあげた。慣れてあげたという違和感はあるが、それでも龍子は両親に深く感謝していた。

そして龍子は学校の若草と言う名の担任にも電話した。

「……………「もしもし」

「もしもし、若草先生ですか？瑠田龍子です。」

「瑠田さん？どうしたんだい？」

「あの、先生、今日の朝の事なんですが…私…」

「どうした？」

「…“回路”になってしまいました…」

「…！」

「先生には打ち明けなければと思って…先生、お願いです、皆には秘密にして欲しいのですが…」

「分かってる。僕も身近にそういう人がいてね。その苦しみは分か

っている。」

「本当ですか!？」

「うん。」

「とにかく、つらい思いは嫌でしょう?でも特別支援とかいう閉鎖された教室には入りたくはないよね。」

「絶対嫌です。」

「分かってる。だから僕がせめて出来る事は、席を一番後ろにする事だけかな。」

「一番後ろ…?」

「少なくとも授業中は皆前向いてるから、なんか…その…おかしい…じゃないね、まあ不測の事態が起きても君の事は見えないだろう?」

「ですね!名案です!」

「とりあえず、皿田に適当な説得して席を交替させよう…しかし、ごめんね。これくらいしかできなくて。」

「とんでもない!ありがとうございます!」

「いえいえ…」

次の日から緊張の日々が始まった。どうやら“回路”は不安に反応する。だから何があっても不安であってはならない。彼女はあまり友達とも話さず、ひたすら無心を貫いた。それでも一部が変化してしまう時は隠したりごまかしたりした。だがそういう生活は苦しくもあった。家についたところには無心が解き放たれ、ばれたのではないかと言う恐怖が沸き上がり、自分の部屋に向かう前に全身がぐずぐずに崩れてしまうのだ。

そんな生活が続いて三日目の時である。龍子は日直の当番だったため、一人で放課後の机を見回っていた。



どうやら異状なしだったので龍子は窓の外を見つめていた。誰か見ている訳でもないが、学校にいる時は常に自分の身体を保とうとしている。そんな生活にため息が出た。

足音が聞こえた。なんだろう。振り返った。

それは相田小見郎という名の同級生であつた。なぜか彼は不敵な笑みを浮かべていた。そして言う。

「瑠田、龍子さん？」

名前を呼ばれ、龍子は「はい…？」と答えると彼はいった。

「瑠田さん、あなた、“回路人間”ですね？」

龍子のはつとした。恐怖が彼女を満ちた。右腕がおかしい。右腕が変化し、糸束となつて蠢いていた。思わず右腕を後ろに隠したが、小見郎はすでに確認していた。

「やつぱり…」

「なんで知つてるの？相田くん。…まさか先生から！」

「若草先生はそんな事をしない。君が“回路”である事は三日前の朝で一目見ただけで分かった。」

「なんで…。あれを見たの？」

「見てないが、親近感を感じたのでね。」

「親近感…？」

そう龍子が訊ねると、小見郎の顔が突然崩れて、糸束になつて蠢いた。

「…！」

「というわけで、僕もそうなのだ。」

「…」

言葉を失つた龍子に対し、小見郎は顔を元の形に戻しながら訊ねた。

「なぜ、君は“回路”になつてそんな辛そうなんだい？」

「辛いからよ。こんな人間じゃないのに変えられて。」

「それは君の思い違いだ。“回路”は新しい人間のスタイルだよ。君がそれになれたのは素晴らしい事だ。」

「…どういう事？」

「いろんな可能性を秘めているのだ。」

「なぜ、“回路”と呼ばれるか分かるかい？」

そう小見郎は訊ね、龍子は言った。

「わからない。」

「本当に回路だからだ。この系束の一本一本は、神経に非常に近い作用をもち、特有の電気信号を持つ。それは接続する事によって信号を発し、また感じとる事ができる。つまり、これでコミュニケーションが出来る。生きた端末だ。」

そう言つて小見郎は右手を“回路”にして見せるが、いまいちわからない龍子は訊ねた。

「コミュニケーション…て…どういう事？」

「まず、僕の手を握つてごらん。」

小見郎は普通の右手を龍子の前に差し出した。

「…握つていいの？」

「どうぞ。」

龍子は小見郎と握手した。たちまちお互いの手が枝状に分裂した。龍子は驚いた。“回路”となった両者の腕の系束の一本一本がお互いに結合し、龍子は腕を通して小見郎に意識が流れるのを感じた。同時に小見郎の意識もこちらに流れるのを感じた。いつのまにか二人は心で会話をしていた。

「これは…」

“これが僕達回路人間のコミュニケーションだ。僕達は意思で会話ができる。心の情景を共有できる。”

「すごい…」

“なぜ悲しい、怖い、といった不安な感情が来ると、身体が回路になつてしまうか。それは普通の人間と同じだ。不安とは満たされない欠損した状態。人は満たされない時に、満たすために他人を求め、意思を共有したくなるのだよ。”

“つまり、コミュニケーションするため…”

“そうだ。しかし、右腕だけでは共有できる情報は限られる。では、さあ。”

二人は見つめ合い、やがて全身が神経で赤色に分裂し、それぞれがお互いの神経と接続した。複雑に絡まり会う神経の中で一つの心象風景が浮かび上がった。それは青々と広がった草地に、広がる青い夜空。そこで二人は会話した。

“ここは…”

“分らない。だが幸せな世界だ。”

“そうだね…、なんだか初めて小見郎くんに会った気分”

“そうだね。始めまして。”

“始めまして。”

龍子がかつて感じた事のない幸福と解放感に包まれ、心が楽になった。この世界もその反映かもしれない。自分という存在事態が閉塞的なかもしれない。他者の意識と共有し、自分を解き放った時の幸せは、まるで、舞台上演技をした時のそれによく似ていた。

“演劇やってたの？”

“部活だけだね。”

これが終わらないで欲しい、と龍子は願った。だが現実はそのほかない。足音が聞こえたので二人は一気にもとに戻った。牛月先生が廊下を通りすぎたのだ。幸いにしてはなかった。小見郎は言った。

“…残念だったね。”

“まあね。”

「でも会えてよかった。これからよろしくね。」

帰り道に龍子は、自分が“回路人間”になれた事を密かに感謝した。グロテスクな代わりに様々な可能性を与えられたのだ。人以外にも

“回路”は有効なのか、例えば動物、植物、はては機械まで。

龍子は家の床に座っていた。膝元にインターネット回線があった。回線は中が剥き出しになっていた。ここから、アクセスする事ははたして可能なのか。期待と恐怖を織り交ぜながら、龍子は右指をゆつくりと近づけ、そして、触れた。

不可解な世界が龍子の脳裏に舞い込んだ。あまりに異質な世界なために龍子は混乱した。それは場所によつては膠着し、場所によつては規則的に動き続けていた。だが試行錯誤していくうちに龍子は馴れてきた。そえか。ここが、インターネットの世界か。

何日か試行錯誤し、世界を勉強し、龍子はためにメールサーバーに侵入して、小見郎のアドレスに以下のメールを送った。

「パソコンと接続できるようになりました。私が。」

しばらくして、サーバーに何か起きた事を知り、龍子は見た。小見郎から返信が来たのだ。

「本当か？やり方を知りたい。教えて！」

龍子にはやりと思ひながら、「いいよ」と返した。

しかし、時に不審な情報にあたる。

「回路人間を殺せ」

「やつらは人間の敵だ」

「人間ではない」

さらには殺すために人々を扇動する計画とやらも発見した。具体的には明示されなかったが、龍子は戦慄を覚えた。これは…。やがて画像を解析すると一つの紋章が浮かび上がって来た。ミミズを喰らう鳥の紋章。下には「回路”抹殺の会」という文字が。龍子は怯えた…

と、その時、龍子の母が部屋に入ってきた。すっかり“回路”に慣れた母は全身糸束に変わり果てた娘に呼び掛けた。

「ご飯の時間よ。」

龍子はすぐにインターネットから離れて元に戻って言った。

「お母さん。私は食べる必要ないでしょ。」

「分かってる。でも家族と会話は必要よ。」

龍子は立ち上がり、母と共に食卓に向かいながら考えた。そうだ。あれから一度も食事という事をしていない。いまの自分はどうか酸素と水だけで生きていけるらしいのだ。そして、糸束。龍子は自分がどれだけ人間という物から離れたのだろう、人間らしさを失ってしまったのだらうと思った。今の自分はもはや肉体的というより、精神的な存在なのだ、と自覚した。

「それは本当の話？」

と小見郎は訊ねた。龍子は答えた。

「うん。あと、“回路人間”かどうかを知る技術を発明したとか言ってる。」

「でも…それってどうやるつもりなんだ…」

「分からない…なんか、向こうの人たち、パソコンじゃなくて紙でデータを作ってるみたい。だから分からないけど…」

「注意は必要だな。僕たちもうかうかとかうしてられないな。」

糸束だった二人は元の姿に戻った。そして部屋を出た。

数日後。

「いま、この地球上で、悪い虫が住み着いております！」

トラックに乗りながらそう演説している男がいた。龍子と小見郎は立ち止まった。男は言い続ける。

「虫と言っても、一見そうは見えない。こやつは人間に化けて隠れておるのです。が、正体を見れば一目瞭然！正真正銘の化け物でございます！皆が知ってる“回路人間！”」

トラックの周りの支持者とおぼしき人々が拍手した。

「その目的はなんなのか？あの触手を見れば分かるでしょう！奴等のはあの醜い触手で我等を取って食おうとしてるのであります。」

歓声が上がった。龍子は逆上し、トラックに向かおうとしたが小見郎に止められた。

「嗚呼なんと恐ろしい！このままだと我々の命が危ない！さあどうすればいい！ご安心下さい、我々があなた達をお守りします！“回路”抹殺の会を応援して下さい！」

「嘘つきめ！」

彼方から大声が聞こえた。別の男がトラックに向かいながら叫んだ。  
「お前らは間違った考え方をしている！ “回路人間”に食事は必要ない！」

トラックの男が答えた。

「おやおや、そう言うあなたは回路人間ですか？」

「そうだ！」

一同は驚いた。トラックの男は言う。

「そうか、では捕獲しないといけませんな。」

トラックから沢山捕獲隊らしき人々が現れ、男に向かった。だが男は異変に気づいた。どうやら両腕が意図せずして赤い糸状に分裂し始めたらしい。脚も変異し、男は立てなくなった。小見郎は言った。  
「あれだ。」

龍子が見ると、なるほどトラックの荷台にレーダーらしき物がある。

「電磁波が超音波かしら……」

「どちらにしろ神経を麻痺して狂わして維持できないようにしてるんだな。」

最終的に全身が紐になって抵抗できない男に、捕獲隊は袋に詰めていった。龍子はひどい、と思ったが、ふと異変に気づいて叫んだ。

「小見郎くん！」

「なんだ！」

「手……」

龍子は自分の右手を見た。右手が糸状に分裂し、元に戻せない。それは腕へとどんどん進行していた。小見郎も同様に崩壊していた。

「レーダーの影響だ！逃げよう！」

物陰にうずくまり、二人は麻痺が収まるのを待った。小見郎は幸い少ししか崩れなかったため、すぐに治ったが、龍子は左腕と右肩まで崩れていた。元に戻そうにも機能しない。向こうの方から誰か啜り泣く声が聞こえる。

そばから小見郎の触手が伸び、龍子の崩れた腕に触れた。



「何してるの？」

「治すおまじない。」

数分経って、龍子の腕は癒えた。二人は立ち上がり、さっきのトラツクがあつた場所に向かった。

そこに一人の、また別の男がうずくまって泣いていた。見ると、なんと、若草先生であつた。

「先生！」

「…ああ、瑠田龍子さん、相田小見郎くん…」

「どうしたのですか？」

「何でもない…何でもないんだ…」

「何でもないはずありません。まさか、捕まつたあの方の事ですか？」

若草先生は目を見開いて龍子を見つめた。

「…いいのか？相田くんの前で言つても。」

「大丈夫です。彼も私と同じです。」

「…！」

相田は軽く会釈をした。若草先生は言つた。

「そうか。実は僕も…」と言いたい所だが、残念ながら僕は普通の人間だ。はあ。捕まつたあの人は伊綱という親友でね。昔から勇気のある奴だった。彼が“回路”になろうと親交は止まなかった。というか、彼のおかげで“回路”に対する偏見がほぼ無くなったのだよ。」

そういつて鼻をかみ、若草先生は話続けた。

「それが、ああいう目にあつてしまったのが残念でならない…あの回路抹殺の会は、捕まつたら最後だ。普通の人間として忠告するが君たちも気を付ける。普通の人間は俗っぽい上に残酷なものだ。だが伊綱はいい奴だった…」

若草先生は再び泣き出した。龍子は先生の傍に座り、言つた。

「先生…私にできる事は少ないですが…お手をお借りしてもよろし

いでしょうか？」

「何かね…？」

龍子は若草先生の手を握った。そして腕を“回路”に変えて若草先生の手に吸着した。その大胆さに小見郎は驚いた。若草先生は慌てて言った。

「な、何を…」

「“慰め”です。」

若草先生はすぐに何かが自分に流れるのを感じた。これは何であろう…：憐れみが先生の心を満たした。なぜであろう、すっかり気分が楽になった。先生は驚きの念で、龍子の顔を見つめた。龍子は微笑んだ。

「良くなつたみたいです。」

そう言つて腕を放した。若草先生は接続された腕を見、龍子を見た。そして感謝の念を示すために頭を垂れた。

日に日に“回路”抹殺の会の動きはエスカレートした。あの不気味な紋章の旗を掲げたトラックが町を横断し、あの「虫」が巧妙に人間に化けて、いつ何時もあの触手で我々人間を狙い続けているに相違ないと力説していた。あらゆる原因不明の誘拐事件などを、彼らは「虫」、すなわち“回路人間”のせいにした。

人々は最初、関心をもたず無視をしていたが、それはむしろ龍子達にとって悪い兆候であった。関心ももたぬまま、無意識に、ひっそりと、彼らの考えが植え付けられるのだ。

例えば。なぜか夜になると子供は外出禁止になり、大人すら夜歩くのも恐れる人がいた。「回路」という悪口が出来た。こうして日に日に“回路人間”は居づらくなった。

そして、ある日、事件は起きた。

いつものように、例のトラックは交差点を横切っていた。またか、と龍子と小見郎は思ったが、どうも様子はおかしい。トラックの荷台に囚われた回路人間がいた。そして回路抹殺会の男が叫んでいた。「皆さん！聞いてください！素晴らしい、朗報を手に入れました！あいつらを本当に抹殺する方法です！」

周囲の人々、そして龍子と小見郎は驚いて振り向いた。

「彼らは驚異的再生力をもっております。頭の傷すら致命傷にはならない…だが、ただひとつ、我々と同じ弱点があります！それは…心臓です！」

わああ、と歓声が上がリ、囚われた回路人間はもがき始めた。

「覚悟するんだ！」

男は銃を向けた。そのとき、回路人間から赤い触手が伸び、銃を握る男の手に触れた。回路抹殺の彼は動揺した。手から“コロサナイ

デ”という切実な思いが伝わったのだ。男は葛藤したが、これは悪魔の囁きだと思い、頭に響く声を無視して引き金を引いた。

夕暮れ。連中は去り、その回路人間だけがそこに残った。龍子は何もできなかった自分に怒りを抱いた。しかし、何ができよう。回路人間は狂暴どころか貧弱である。それを彼らは虐げているのだ…。龍子はそれを見た。体力を失い、体の維持ができずに触手だけになったその姿。龍子は静かに哀悼の念を示し、申し訳ないと頭を垂れた。

その時、触手が動いた。龍子は驚いた。まだ生きていたのだ。龍子はそつと触れた。すると話しかけてきた。

“私の体は…もう…使い物にならないみたいだ…だが彼らのために死ぬに死ねない…”

龍子は言った。

“何かできることは…”

“いいよ。ありがとう…優しいお嬢ちゃんだね…”

顔は崩れて分からなかったが笑っているようにも見えた。

おそらく老人と思われる彼は、静かに語りかけた。

“あなたが私にできる事は何もないだろう…ただ一つ願おう。あなたは生きてる。それは素晴らしい。だからあなたは私の分、しっかりと生きてくれればそれでいい…”

“あなたの分しっかりと生きる…”

その言葉に龍子は閃きを感じた。

“待ってください！一つだけ方法があります！”

“何かね…”

“あなたの分を生きます。そうです。あなたはきっと素晴らしい方。

死なせるわけにはいきません。ですから、私の体で生きて下さい！”

“何を…？”

“私とあなたで接続して、あなたの意思を私が預かるのです。”

“つまりあなたの体に私が住むというのか？なんと恐ろしい事を…”

“それしか助かる道はありません。”

“しかし…”

“時間はありません。さあ。”

“…”

老人は決意し最期の力を振り絞って全身触手化した龍子と接続した。老人の記憶が滑り込んできた。老人の名は真田士郎。突然“回路”になった彼は、仕事仲間から追い出された。が、それをきっかけに“回路”の人々を守りたいと思い、人寂れた町でひっそりと“回路人間”のユートピアを築き始める。そこを住む者は「ポインセチア」と読んだ。回路人間の赤い姿に例えてだ。「ポインセチア」の人々は真田をリーダーとしていたが、今、自分が殺されたらこの先どうなってしまうのか。龍子は思った。

老人の触手と龍子の触手は融合し、老人の体は次第に自分自身の体から剥がれて龍子の中に取り込まれた。後には白骨が残った。小見郎はその様子を見て、しばし驚愕していた。

老人の触手と融合した龍子は自分の体を再構成した。姿は前の龍子のままでし、経験こそ増えたものの、意思も、自分以外にはない。龍子は気づいた。真田士郎の意思と自分の意思は融合した。だが最終的な選択意思を真田は龍子に委ねたのであろう。結局は龍子そのものになってしまった。

だが、龍子は以前の自分とは違っていると確かに自覚していた。自分は実質「ポインセチア」のリーダーになってしまったのだ。そうだ、彼らの元に向かわないと。

相田小見郎は夕陽を背に振り向く瑠田龍子を見た。龍子は言う。  
「これから、大変よ。」

袋を担ぎ、歩きながら小見郎は龍子に訊ねた。

「『ポインセチア』の場所分かるの？」

「分かる。あと、20分程だよ。」

思いの外、自分とは全然違う存在になってしまった龍子に小見郎は驚きと寂しさを感じずにはいらなかった。彼女は己のアイデンティティーを犠牲にして一人の命を助けようとした。その結果、彼女になにかが変わったのである。今、彼女自身が何を考え何を思っているか、まだ分からない。恐怖、をも彼は感じていた。とりあえず小見郎は袋を担ぎ続けた。

やがて、夜になった頃に、さびれた建物に着いた。薬局の看板がぶら下がっているが、どう見ても閉店している。

二人は真つ暗の薬局に入り、ゆっくりと中へ進んだ。誰もいない。カウンターを越えて事務室の扉を開けようとした。その時。

「だれ？」

声が聞こえてきた。扉の向こうからだ。龍子は答えた。

「瑠田龍子と申します。“回路人間”です。」

すると声は答えた。

「まず、リーダーの真田さんとお話して、許可しなければなりません……」

なぜなら回路人間と言えども裏切り者がいるかもしれないから。そういう事は龍子は痛感していた。だがどうやって信じてもらえるか……。

「真田さんはいらつしやらないのでしょうか？」

龍子のその言葉に相手は動揺した。

「…なんで知っているのですか…」

「真田さんから言伝てをしに伺いました。」

「しかし…真田リーダーの言い付けが…」

相手は未だに頑として聞かない。こうなったらこういう言い方しかできない…龍子は心が痛かったが勇気を振り絞って言った。

「真田さんは、殺されました。」

相手が暫く沈黙し、訪ね返した。

「本当なのか…？」

「厳密には、生命維持ができなくなりました。亡くなる寸前に、通りかかった私と回路で“接触”をしました。彼の“回路”は全て私の元に結合し、彼の意志は私の中にあります。」

「嘘だああ！」

ドアの向こうで相手は叫んだ。

「つまり、お前が真田リーダーだと！？そんな事はあつてはならぬ…リーダーは他の所で生きてるんだろう？」

「いいえ…違います…」

信じてくれない…当然である。龍子とて、あの行動が上手くいくとは確信してなかった。しかしこうなったら説得するしかない。

龍子はドアの端に手を置いた。そして手を“回路”にし、ドアの間から触手を伸ばした。龍子は言った。

「それに触れて下さい。答えがここにあります。」

ドアの向こうからは返事はない。龍子は待った。

やがて龍子はその人を感じた。その人どころではない、部屋の中の多くの人々が龍子と“接続”していた。小見郎も“接続”した。声が聞こえてきた。

“嗚呼、リーダーが…”



“ここに生きてらっしゃる…”

“リーダー…”

中の世界で龍子がいた。否、龍子の姿をした真田であつた。彼女は言つた。

“皆さん、普通の人たちはとうとう我々を見捨てました。我々を同じ人間と見るのを止めたようです。ですがそれに対し我々は死ぬべきか？それは違います。しかし人間は我々が生きる事を望みません。対立、戦いが、始まりました。”

大勢がそれに賛同し、“回路人間に勝利を！”と叫んだ。だが龍子は首をふり、言う。

“しかし、武力は私は望みません。そもそも私達は脆い存在…。戦つたところで、勝ち目はなく、たとえ成功しても大いなる代償が待ち構えています。”

“龍子、それは違う。”

突然小見郎が叫び始めた。

“我々はまだ様々な可能性が秘められている！普通の人間とは違うんだ！普通の人間ではできない技術もできるはずだ。我々に勝ち目はある！いざ！戦いだ！”

人々はわけも分からず小見郎に賛同した。龍子は小見郎の意見に驚いた。それは何かおかしいと思つたが、「殺すのはイケナイ」程度の陳腐な反論しかできない。ちよつと見ないうちに、小見郎はどうやらある種の狂気に陥つていた。すなわち生存の恐怖。龍子への恐怖。いつの間にか、多くの人々が龍子から接続を断つた事を知つた。小見郎まで。ドアは開き、小見郎は歓迎された。龍子は悪い予感しかしなかつたが、それを伝えるには相手が余りにも多い。龍子はどうしようか分からず、あまりの裏切りに、崩れ落ち、泣き出した。全身はたちまち赤い触手と変異した。

“泣いてはいけない”

という自分の声が聞こえた。いや、真田の声かもしれない。

“ 周りがいかに自分と違う流れになろうと、自分の流れを保つのだ。それが真実なら流されない。あなたはそれを選択できる。”

“ でも、私は一人…”

“ いや、そうではない。顔を上げなさい。”

龍子は見上げた。室内で騒いでいる小見郎たちから離れて数人の回路人間が龍子を見下ろしていた。彼らは言った。

「しつかり。」

「真田、いや瑠田リーダー。」

「私達はあなたに賛同します。」

龍子は冷静になり、元の姿に戻って笑顔を見せて言った。

「そうね。」

「我々回路人間は、コンピュータと接続できる力がある。」  
小見郎は言った。

「と言うことはコンピュータ兵器を自在に扱う力がある。つまり、普通の人間達より幾分早く行動ができる…ネットワークにおいては我々の方が勝っている！これで勝てるぞ！」

結局自分に対する忠誠心は不安によるものに過ぎなかったのか、と龍子は思った。以前は大多数が「ポインセチア」で自分をリーダーだと慕っていたのは、その方が安心できたからであり、リーダーが事実上崩壊した今は、新たな小見郎というリーダーを求めるようになったのだろう…

だが、これは、真田としての自分の思考だ。一方で、かつてはごく普通に学校生活を歩んだ瑠田龍子という自分がいる。二人の意識が融合した今、龍子は自分が分からなくなった。恐らく、自分は龍子でも真田でもない、新たな存在となりつつあるのだろう。おそらくあの融合をきっかけに自分は変わってしまった。

そして今。

“ 龍子様…”

“ リーダー…”

数少ない支持者と龍子は体を“回路”にして、接続して、心の交流をしていた。

龍子は言った。

“今は耐え忍ぶ時です。もうすぐ彼らは攻撃を仕掛けるでしょう。そうすれば普通の人間から迫害を受けます。それでも私達は耐え抜きましょう”

“いいえ、もう駄目でしょう…”

支持者の一人が言った。龍子は訊ねた。

“何故？”

“人間は初めから我々を見捨てていました。我々と彼らは見た目が同じでもあまりにも生物が違います。彼らと分かち合う事はもうないでしょう。”

“そんな事は言わないで…”

“私は最後の希望にすがりたいと思います。”

“希望…？”

“あなたです。”

“私？”

“あなたに委ね、真田リーダーと同じようにあなたを方舟にして生きます”

そして支持者全員が言った。

“あなたを、方舟に。”

龍子は周りの異変に気づいた。皆が自分に依拠し、結合し始めたのだ。どんどん皆の意思が滑り込んでくるので龍子は恐怖で悲鳴を上げ、叫んだ。

“やめなさい！自我が壊れる！自分を大事にして！”

“いいのです…我々はあなたがいるのですから。”

支持者の骨から系束の肉体が剥がれていった。もう龍子はそれを放す事はできない。ただ、自動的に自分の身体に取り込むのみだ。様々な人生が自分の脳内に侵入した。拒絶も否定もできない。

気がつけばそこには瑠田龍子しか人はいない。周りは支持者の白骨のみだ。彼らの“回路”はもう自分の物となってしまう、彼らの骨に戻すことはできない。龍子はふと、窓にうつる自分の体を見つめた。姿はいつもと変わらない。だが自分はまた変わってしまった。

「回路抹殺の会」のトラックは今日も、人々を煽動し続けていた。

「我々はあのようなグロテスクな化け物の存在を許していいものか！ 否！ 決して許してはならぬ！ 奴等を殺し、殺し、殺しに殺して、殺して、殺して、殺しまくるのじゃあああ！」

だがその時、聞いたこともない足音が聞こえた。金属的になかつかつかつという足音。見ると、細い鎧を着た集団である。手は無く、代わりに銃器になっていた。

先頭が叫んだ。

「我々、  
“ 回路人間 ”  
はお前らに殺された復讐をする！ 覚悟しろ！」

辺りは悲鳴に満ち、トラックは一気に逃げ出した。軽く銃で威嚇するだけで、人々はあえなく敗走した。回路人間らは勝利の叫びを上げた。神は我々に味方をした！彼らは後を追いかけた。

トラックで逃げながら、運転手でもあり、「回路抹殺の会」のリーダー奈谷落夫は狂気のお笑いを浮かべながらしきりに呟いた。

「計画通りじゃ計画通りじゃ計画通りじゃあああ！」

そして電話を掛けた。

「もしもし？奈谷だが。そうだ！虫どもは計画通り復讐に来た！あの単細胞めが。これで奴等を法的に始末できる。鎧かぶつて襲うような危険な化け物に情けは無用！あとは君の力で我が国の軍隊に始末してもらうだけじゃ！ぐはははははははは！」

…虫どもは計画通り復讐に来た！…これで奴等を法的に始末できる。  
…我が国の軍隊に始末してもらっただけじゃ！…

電話線を盗聴していた龍子は息を飲んだ。このままでは、小見郎達が危ない…すぐに知らせなければ…幸いにして小見郎達が着ている鎧は通信機能もある。龍子は「ポインセチア」にある予備の鎧を着し、通信しながら彼らのいる街へと向かった。

“みなさん！”

人間達を追いかけながら、向こうの彼らも声を聞いた。龍子の声だ。なんだろうと思っただけは続いた。

“みなさん！！早く逃げてください！軍隊が来ます。武器をもった軍隊が来ます！早く逃げないと命が危ないです！”

一行は立ち止まった。

“どうしますか？小見郎隊長”

そう誰かが聞くと、小見郎はしばらく黙り、そして言った。

“我々がなぜ武器を持っているか。それは武力に立ち向かうためだ！ここで逃げるのは許されない！いざ、行くのだ！”

一行は再び進み始めた。龍子がどんなに訴えても聞く耳もたず。結局は私が向かうしかない…

一行の先に黒々と何かがいた。龍子の言う通り、軍隊か。その何かから声が聞こえた。

「お前らは危険分子と見なされ、政府から抹殺の許可を頂いた。ひからびたミミズのように死ぬが良い。」

向こうから爆発音が聞こえ、黒い砲弾が飛んできた。砲弾は回路人間の真後ろのビルに衝突した。周囲はたちまち爆煙に包まれた。

龍子が街についた頃には街は煙と銃声に覆われていた。この中を潜って助けにいかねばならない…怖い…だが勇気を出さねば。龍子は煙の中を進んで行った。

ビルの影に小見郎はいた。彼は両腕を改造した銃で乱れ打ちをしていた。所詮戦いに馴れない連中である。命中率は全く無い。そして一発の銃声が全てを変えた。それは遠くの方にいた、軍のスナイパーライフル。その弾丸が、小見郎の胸を撃ち抜いた。小見郎は「ごうっ」と呻いて倒れた。

「小見郎くん！」

龍子は彼に駆け寄った。小見郎は苦しみながら言った。

「悔しい…悔しい…悔しい…こんな所で死ぬなんて…」

「助かる方法はあるわ！」

龍子は自分の鎧の腕部と小見郎の鎧の腕部を外した。むき出しになった両者の腕で龍子は接続しようとした…が、小見郎は拒絶した。

「なぜ!？」

「僕は…小見郎として生きたい…」

「でもあなたの体は直に死ぬ！」

「僕は…怖いんだ…龍子ちゃん…君が…怖い…」

龍子は衝撃を受けた。自分は普通に振る舞ってたつもりなのに、恐怖の存在として見られていたのだ。

銃弾ははまだ飛び交う。

「でも助かる道はこれ以外に無い！」

「龍子ちゃんはそう言う自分を奇妙に思わないのかい？」

そう言われて龍子は思った。そうだ。私はいったい何なのだろう。私が誰なのか最近分からなくなった。すでに五人以上の人格と彼女は融合していた。しかし、最近融合した時の言葉を思いだし、言った。

「私は方舟。皆の魂を乗せて運ぶ方舟よ。」

小見郎は鎧の頭でしばらく龍子を見つめた。そして、握手した。

「では、一切を貴方に委ねます。」

そして両者は回路になり、回路は融合した。腕部から小見郎の系束のような体は引き摺り出され龍子の中へと入って行った。龍子は彼の人生を知った。“回路”になって、親から拒絶された彼。恐怖と不安で苦しんだら彼。そして回路人間の可能性を知り、不安を解決するためにその優越感に浸った彼。その哀れな生涯にどうして龍子は自分が過激な復讐を望まず、人間に対して小見郎のような反感を抱かなかったかを知った。親が“回路”になった彼女を認めてくれたからだ。普通の人間に希望を感じたからだ。

向かえば多くの鎧を来た回路人間が撃たれて倒れていた。彼らのうち生き残った者は絶望を感じて、龍子が来ると、すぐに武器腕をはずして龍子に触手を伸ばし、彼女の元に行ってしまった。そうして次々と人格を吸収してしまった龍子は、鎧のリーダーにより生き残りが一人もない事を察知した。あとは自分のみ。この鎧を来たら必ず撃たれるであろう。では鎧を脱いで降参するしかあるまい。

龍子は無防備な姿で手を上げて人間の前に現れた。たちまち軍兵は彼女を調べ、捕らえた。彼女は密室の護送車に押し込まれ運ばれていった。



刑務所といってもまるでペンションのような快適さであった。なぜだろう。さつきまで普通の人間に殺されかけたのに。龍子は疑問に思うが、届いた手紙で真実を知る。手紙はなんとあの懐かしい若草先生からだ。

“ 瑠田龍子さん。

僕は貴方に謝らなければならない事がある。貴方は以前回路人間になってしまった事を僕に打ち明けたね。誰にもばらさないと約束したよね。だけど貴方が捕らえられたのをテレビで見た時、どうしても助けなきゃと思い、多くの人に打ち明けてしまった。申し訳ないけど多くの信用を得た。彼女が邪悪であるはずがない、第一、鎧を着ていなかった、彼女が自ら捕まったのは争いを納めるためだ、と信じてもらえた。署名運動も起きた。おかげで君は死刑を免れた。残念ながら君を怖がる人が多いから、こんな遠くの場所で暮らすことになったけど、これが僕のできる限りやった事だ。許してほしい。”

龍子は手紙を見ながら感謝と切なさで胸が一杯になった。これが、おそらく、最後の先生の優しさなのだろう…

龍子の住んでいる場所は、遠く離れた孤島であった。海の近くに小屋が建っており、周りは青々とした草で生い茂っていた。

そこに訪問者が来た。ヘリコプターで現れた彼を見て、龍子は驚いた。“回路抹殺の会”のトラックに乗っていた男ではないか。彼は自己紹介した。

「奈谷落夫です。」

龍子の心臓は高鳴り、一瞬後退りした。かつて自分を撃ち殺した男……。それに気づいた奈谷は、ははははと笑い言った。

「心配いらない。君を殺す事は法律で禁じられている。もっとも以前じいさんを殺してしまっただがね。もちろん弁解はしない。」

「では何の用ですか？」

「君に興味があつてな。」

「化け物としてですか？」

「いや、君は他の化け物とは違う。どこが違う。」

「他の化け物と呼んでる人たちだって、皆私と同じです。あなたが思い違いをしているだけです。」

「そうだな……だがこういつまでも潮風の中、立って話してはられない。中に入ってもよろしいかな？」

龍子はしぶしぶ承知した。

部屋の机の端と端に二人は座っていた。机の真中に太陽が照らされている。

奈谷は言った。

「私は謝らなければ。君たちの事をろくに知らずに、君たちに対し酷い仕打ちをした。許していただきたい。」

龍子にはさまざまな思いが駆け巡った。復讐、拒絶、許されない、しかし報復した所で何もならない……おそらくそれは龍子の体内に流れる無数の殺された魂の叫びだ。それらを聞き、やがて龍子は言った。

「過ぎた話だもの。何も思わない。」

「そうか……で、私達はもっと君のような人種を知るべきだと思った。」

「もう一人しかいませんが。」

「まあ……そうだな……まず聞きたい。その糸束はいつたいどんな働きをするんだ？」

そんな基本的な事を知らないで誹謗中傷し殺したのか！？と龍子は

一瞬憤りを感じた。身体もそれに反応して一瞬回路になった。それに気づいて奈谷は言った。

「申し訳ない…あの時の事は水に流してくれ…あの時の我々は愚かった…」

物分かりの良さそうな言い方、これが彼をカリスマにした要因だろう、と冷ややかに思いながら龍子は言った。

「神経よ。」

「神経？」

「感覚器官。私達はお互いにこれを接続してコミュニケーションを取るの。」

「本当か…？」

「人間にもできるわ。やる？」

龍子の手が回路に分裂した。

「これに触れる…？」

「そう。うつつたりとかしないから大丈夫。」

奈谷は恐る恐る、グロテスクな龍子の腕に触った。触手はたちまち奈谷の腕をとらえた。

「あ…」

「あなたの心がみえる。あなたも私達の心がみえる。」

私達…？奈谷は心象風景の中の龍子を見た。それは、一見龍子の姿だったが何かににていた。そう、多くの回路人間、自分が殺した老人などだ。あいつが、生きている…なぜだ…

「ぎあああ！」

奈谷は叫んで、龍子から手を離れた。恐ろしかった。この娘は、死んだ魂と共にいるのだ。どうりで変に心が強いわけだ。しかしなぜだ。

だが龍子はさっきのような冷たい怒りを見せず、慈愛の瞳で奈谷を見ていた。龍子は言う。

「あなたの心も見た。」

波音が小屋の外で静かに打たれ、カモメがきやあきやあ鳴いた。龍子は静かに言った。

「可哀想に……だから弱いものを殺してしまうのね。あなたのその性状は、自分を滅ぼす事となるわ。」

奈谷は去り、龍子が一人残った。この先、大して変化もない。ひとりぼっちだ。だから龍子は自分を省みる。小屋を出て、海岸の座りながら一人考えた。自分は、いったい誰なのだろう。何者だろう。自分はかつて、配管工で、ゴルフ選手で、コンサルタントで、「ポインセチア」のリーダーで、親にいじめられた学生で、親に愛された学生で……等々。さまざまな自我が入り混じり、はたしてどれが本当なのか判断できなくなる。

やがて彼女は判断しなくて良いのだと思った。人格とは特徴であり、人格の集合体によってできたものは“普遍”という形質だ。自分はあまりにも沢山の人格を体験して普遍的な存在となったのだ。しかし、だからといって、今生きるうえで何になるう。回路人間であるが故にこの先何もない。絶望。

その絶望がなぜか不思議な幸福感を生んだ。この先なにもないということは、現実の束縛もない。自由だ。そうだ。自由だ。これから永遠への開放へと飛び立つのだ。

龍子は開放感と共に自分が壊れていくのを感じた。同時に、体の端から糸状の回路に分裂するのを感じた。その糸は回りに広がり、翼のように龍子の背後に広がった。やがて糸は骨から剥がれ、大きな翼として体から離れていった。

風が吹いた。糸束は風に乗って飛んだ。島には龍子の骨が残った。糸束はしばらく空を浮かんでいた。地上を見下ろせば人間の地。ふと、彼女は自分の両親と若草先生を思い出した。これからもう会うこともない。お別れを言うべきだったかなあと彼女は思ったが、風はお構いなく吹き続け、糸束は飛び続ける。思考もなんとなく風に吹かれて消えていく。

やがて糸束はそのまま落ちて、海のほうへに、ぽちゃん、と沈んだ。糸束は一気に細かく分裂し、蠢きながら四散した。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9831o/>

---

糸束

2010年11月18日03時19分発行